

# 青年の孤独に対する捉え方 - 孤独感 , 自己意識 , 精神的健康 , 自我同一性との関連

|     |   |
|-----|---|
| 著者  | 大東 美穂子, 岩元 澄子   |
| 雑誌名 | 久留米大学心理学研究  |
| 巻   | 8   |
| ページ | 75-84   |
| 発行年 | 2009-03-31  |
| URL | <a href="http://hdl.handle.net/11316/564">http://hdl.handle.net/11316/564</a> |

## 青年の孤独に対する捉え方 孤独感、自己意識、精神的健康、自我同一性との関連

大 東 美穂子  
岩 元 澄 子

### 要 約

本研究の第一の目的は、青年の孤独に対する捉え方を明らかにすることであった。大学生85名に、孤独に対する捉え方に影響を与える要因を捉えることを目的とした質問紙調査を実施した。その結果、「否定的評価」、「自己成長機能」、「肯定的評価」の3つの要因からなる孤独に対する捉え方尺度が作成された。

第二の目的は、孤独感、自尊感情、抑うつ、自我同一性に関する質的な差異を調査することであった。大学生284名に孤独に対する捉え方尺度、改訂版 UCLA 孤独感尺度、孤独感類型判別尺度、自尊感情尺度、CES-D 日本語版、多次元自我同一性尺度の6種類の質問紙が実施された。これらの比較の結果、自己成長機能の捉え方が強い青年は個別的自己の自覚が高いこと、一方、肯定的評価が強い青年は自尊感情が高く、抑うつが低く、自我同一性達成度が高いことが明らかとなった。

キーワード：孤独に対する捉え方、孤独感、自尊感情、抑うつ、自我同一性

### 問題と目的

日本における孤独感研究を概観すると、Peplau & Perlman (1979) もしくは、落合 (1982) のいずれかの定義に基づいたものに大別される。Peplau & Perlman (1979) は、孤独感を「個人が現実を経験している社会的関係（達成水準）が、本人がもちたいと望んでいる関係（願望水準）に比べ、下まわったり不満であると認知されるときに生じる不快な感情」と定義している。また、この孤独感が社会的な関係不全に由来するという状況の立場から、Russell, Peplau & Cutrona (1980) は、The revised UCLA Loneliness Scale を開発し、その日本語版（以下、UCLA と表記する）が工藤・西川 (1983) によって作成されている。UCLA を指標とした高孤独者の特徴を探ることを目的とした研究から、原因帰属（広沢, 1985, 1986；工藤・西川・熊取谷, 1985；中村, 1986；諸井, 1990）、対処方略（広沢, 1985, 1986, 2001, 2002；工藤・熊取谷・西川, 1986；諸井, 1989）の違いなどが要因と

して調べられてきた。さらに、上記のような要因や孤独感の程度の差異を生じさせる要因の検討として、性別（工藤・西川, 1983；工藤・西川・熊取谷, 1985, 1986；諸井, 1985, 1987, 1989, 1990, 1991 a, 1991 b；広沢, 1986, 2001, 2002）、年齢（工藤・西川, 1983）、測定時期（諸井, 1986）、居住環境（諸井, 1984, 1986, 1991 a）、友人や親友数（工藤・西川, 1983；諸井, 1984, 1985, 1986）、パーソナリティ（工藤・西川, 1983）などが検討されてきた。

一方、落合 (1982) は、孤独感を「自分（または人間）が孤独（ひとり）だと感じる」と定義した上で、その中に心理的条件により規定される狭義の孤独感と物理的条件により規定される物理的孤立感とが含まれるとし、孤独感類型判別尺度（Loneliness Scale by Ochiai；以下、LSO と表記する）を作成している（落合, 1983）。LSO を用いた研究から、孤独感の在り方（落合, 1983）、孤独感の外延構造（落合, 1985 b）などの差異が明らかにされ、そのような差異を生じさせる要因として、性差（落合, 1974；中野・永江,

1996), 年齢 (落合, 1982; 中野・永江, 1996; 野上ら, 2000), パーソナリティ (落合, 1983) などが検討されてきた。しかしながら, いずれの定義ないしいずれの尺度を用いた研究においても, 孤独感の諸側面に個人差をもたらす要因に関する研究は, 年齢や性別など個人の属性に着目されている程度で, 検討が進んでいるとは言い難い。

孤独感ではなく, 「孤独」という事象自体に対する個人の認知的な側面に着目した研究がある。落合 (1974) は, 高校生を対象とした孤独感の予備研究から, 孤独感の規定因として, 「孤独への目の向け方」, 「人間同士の共感についての感じ方」という2要因を抽出している。また落合 (1976) は, 大学生を対象に同様の調査を行い, 孤独への否定的評価・嫌悪, 孤独への積極的評価・愛好, 孤独への愛好と嫌悪の間のゆれ, ひとのあり方について知る, からなる「孤独への態度」という要因を抽出し, 孤独感の構造として, 自己の個性性についてのめざめと, 人間同士の共感についての感じ方という二次元が存在するという点において, 先行の1974年の報告にほぼ対応していると述べ, その後にLSOを作成し (落合, 1983), 孤独感研究を進めている (落合, 1984, 1985 a, 1985 b)。中野・永江 (1996) は, 「孤独感と精神的健康との関連を考えると, 孤独感の程度よりも, 本人の孤独のとらえ方や孤独に対する態度 (受容的であるか非受容的であるか) が鍵となる」と仮説し, 落合 (1983) のLSOを元に作成した孤独感の量と質を測定する尺度を用いた研究から, 精神的健康には孤独感の量, 孤独感の受容度の順に影響力が強いことを明らかにしている。落合 (1974) の予備研究で抽出された要因である, 「孤独への目の向け方」や「孤独への態度」, 中野・永江 (1996) の研究の中心的視点であった, 孤独のとらえ方や孤独に対する態度は, 共に, 個人が「孤独」という事象をどのように捉えているかという点で類似した視点である。そして, 孤独感の在り方や程度が個人によって異なるように, 「孤独」という事象の捉え方も個人によって異なるとすれば, 孤独に対する捉え方の違いによって孤独感の在り方や程度も異なる可能性が示唆される。したがって, 孤独感研究において, 孤独感に影響を与える要因の一つとして個人の孤独に対する捉え方という新たな視点を導入する意義は深いと考える。ただし, その際に課題となることとして, 中野・永江の研究においては孤独に対する態度と孤独感の受容が同義に扱われているが, 落合の研究 (1974, 1976) を踏まえると, 孤独に対する捉え方を孤独の受

容という観点以外にも質的に検討する必要がある。

また, 孤独感の関連要因についての研究の中で, 心理的要因に関しては自己意識や精神的健康について検討されたものが比較的多い。まず自己意識について, 孤独感と自己意識の関連を検討した研究は多数見られるが (諸井, 1985; 今林, 1992; 吉山, 1992; 中野・永江, 1996; 原田, 1999; 杉山, 2004), 特に多く検討されているのが, 自己評価の受容に関する自己意識である自尊感情であり, 孤独感と自尊感情との間には負の関連があることが明らかにされている (Peplau & Perlman, 1979; Russel et al, 1980; Goswick & Jones, 1981; Hojat, 1982; 工藤・西川, 1983; Bell & Daly, 1985; Jones et al, 1985; 諸井, 1985, 1987, 1989, 1990; 宮下・細川, 1991)。次に精神的健康について, 孤独感と精神的健康との関連を検討した研究はいくつも見られるが (工藤・西川, 1983; 諸井, 1987; 吉山, 1992), 特に多く検討されているのが抑うつであり, 孤独感と抑うつの間には正の関連があることが明らかにされている (Russel et al, 1980; Diamant & Windholz, 1981; Hojat, 1982; 宮下・細川, 1991)。以上のことをまとめると, 孤独感研究においては, 自己意識の中でも特に自尊感情, 精神的健康の中でも特に抑うつとの関連は, 概ね一致をみている知見である。したがって, 孤独に対する捉え方においても, それらの要因との関連を検討する意義があらう。

落合 (1993) は, 孤独感を自我の発見に伴って必然的に感じるようになるものであり, 青年の抱える代表的な生活感情であると述べている。Spranger (1953) も, 青年期の特徴の一つである自我の発見には大きな孤独の体験を伴うと述べている。また, 小林 (2006) は, LSOにおいて最も成熟した孤独感のタイプとされるD型が, 最も未熟とされるA型より, 同一性の混乱が高いことを報告し, 孤独感と自我同一性 (Erikson, 1959) の関連を示している。これらのことから, 青年の孤独に対する捉え方を解明していくとき, 自我の発達, 特に自我同一性の確立と, 孤独感や孤独の体験との関連を把握することは, 重要な視点であると考えられる。

以上のことを踏まえ, 本研究では, 以下の二つの目的を設定する。第一に, 青年の孤独に対する捉え方の在り方を明らかにする。その際, 孤独に対する捉え方の在り方を測る尺度を作成する。第二に, 孤独に対する捉え方と孤独感, 自尊感情, 抑うつ, 自我同一性達成度との関連について検討する。その際, 現代青年の

孤独に対する捉え方の違いによる各要因の差異についても検討する。

### 予 備 調 査

#### 方法、結果

孤独に対する捉え方尺度を作成するために、第一段階として、尺度の項目収集のため、2008年6月から7月にかけて、「孤独とは」から始まる質問文20問で構成される自由記述による質問紙調査を実施した。対象は、A大学の学生85名（男子27名、女子58名）で、回答者の平均年齢は22.3歳（SD = 3.9）であった。調査の結果に対して、心理学専攻の大学院生6名が共同で検討し、孤独に対する捉え方であるとした項目で、回答者数が4人以上であった32項目について、質問項目として適切な文章となるように修正し、暫定項目とした。

第二段階として、暫定尺度の信頼性の検討のため、2008年10月に、孤独に対する捉え方尺度の質問紙調査を実施した。対象は、A大学の学生284名（男子88名、女子196名）で、回答者の平均年齢は20.2歳（SD = 1.8）であった。回答に不備のあった28名を除いた256名を分析対象とした。この暫定尺度の32項目に対する最尤法、プロマックス回転による因子分析では、固有値の変化と解釈可能性を考慮した結果、3因子が抽出

された。各項目のうち、因子負荷の絶対値が.40に満たなかった5項目を削除し、残りの27項目での再度最尤法、プロマックス回転による因子分析での3因子による累積説明率は54.1%であった。第1因子は13項目で、因子負荷量の高い順に「孤独はつらいものだ」、「孤独はかなしいものだ」、「孤独は苦しいものだ」などの項目が集まったことから、孤独に対する「否定的評価」因子と命名した。第2因子は9項目で、因子負荷量の高い順に「孤独は人を成長させるものだ」、「孤独は自分を見つめなおす機会になる」、「孤独は人を強くするものだ」などの項目が集まったことから、孤独の「自己成長機能」因子と命名した。第3因子は5項目で、因子負荷量の高い順に「孤独は楽しい」、「孤独は楽だ」、「孤独は落ちつくものだ」などの項目が集まったことから、孤独に対する「肯定的評価」因子と命名した。3因子内部で、「自己成長機能」と「肯定的評価」との間に有意な正の相関がみられ（「肯定的評価」： $r = .33$ ）、「否定的評価」と「自己成長機能」、「肯定的評価」との間に有意な負の相関がみられた（「自己成長機能」： $r = -.15$ 、「肯定的評価」： $r = -.55$ ）。また、クロンバックの係数は、「否定的評価」で.93、「自己成長機能」で.81、「肯定的評価」で.86であり、尺度の内的整合性が確認された（Table 1）。

Table 1 孤独に対する捉え方尺度の因子分析結果

| 項目番号        | 項目内容                | 否定的評価 | 自己成長機能 | 肯定的評価 | 共通性  |
|-------------|---------------------|-------|--------|-------|------|
| 10          | 孤独はつらいものだ           | 0.87  | 0.04   | -0.01 | 0.75 |
| 31          | 孤独はかなしいものだ          | 0.79  | -0.03  | 0.05  | 0.59 |
| 21          | 孤独は苦しいものだ           | 0.76  | 0.03   | -0.03 | 0.60 |
| 25          | 孤独はこわいものだ           | 0.75  | -0.06  | 0.05  | 0.53 |
| 13          | 孤独は人を不安にさせるものだ      | 0.74  | 0.17   | 0.00  | 0.54 |
| 23          | 孤独は切ないものだ           | 0.72  | 0.11   | 0.05  | 0.47 |
| 3           | 孤独は気持ちを落ち込ませるものだ    | 0.69  | 0.02   | 0.07  | 0.42 |
| 1           | 孤独はさみしいものだ          | 0.68  | -0.03  | -0.08 | 0.53 |
| 7           | 孤独は感じたくない           | 0.64  | -0.14  | -0.18 | 0.65 |
| 29          | 孤独は暗いものだ            | 0.63  | -0.11  | -0.03 | 0.47 |
| 6           | 孤独は嫌いだ              | 0.63  | -0.11  | -0.23 | 0.47 |
| 26          | 孤独は自分との戦いだ          | 0.59  | 0.08   | 0.25  | 0.25 |
| 33          | 孤独は心の中の闇だ           | 0.49  | -0.09  | -0.12 | 0.35 |
| 9           | 孤独は人を成長させるものだ       | -0.08 | 0.82   | -0.19 | 0.59 |
| 14          | 孤独は自分を見つめなおす機会になる   | 0.09  | 0.66   | 0.02  | 0.43 |
| 5           | 孤独は人を強くするものだ        | -0.12 | 0.66   | -0.06 | 0.44 |
| 8           | 孤独は誰もが経験するものだ       | -0.09 | 0.54   | -0.21 | 0.24 |
| 17          | 孤独は考える時間になる         | 0.10  | 0.54   | 0.16  | 0.36 |
| 2           | 孤独は必要なものだ           | -0.22 | 0.51   | 0.04  | 0.37 |
| 12          | 孤独は誰もが感じるものだ        | 0.10  | 0.50   | 0.06  | 0.26 |
| 24          | 孤独は人との関わりの大切さを気づかせる | 0.36  | 0.48   | -0.04 | 0.30 |
| 22          | 孤独は受け入れる必要がある       | 0.15  | 0.47   | 0.30  | 0.37 |
| 32          | 孤独は楽しい              | 0.00  | -0.16  | 0.80  | 0.57 |
| 30          | 孤独は楽だ               | -0.02 | -0.14  | 0.80  | 0.59 |
| 18          | 孤独は落ちつくものだ          | 0.02  | 0.08   | 0.77  | 0.63 |
| 15          | 孤独は好きだ              | -0.20 | 0.06   | 0.69  | 0.72 |
| 27          | 孤独は自由だ              | 0.13  | 0.05   | 0.64  | 0.36 |
| 説明分散        |                     | 6.62  | 3.37   | 2.87  | 12.9 |
| 説明率         |                     | 31.2  | 12.1   | 5.06  | 48.4 |
| $\alpha$ 係数 |                     | 0.93  | 0.81   | 0.86  |      |

## 本 調 査

### 方法

#### 1. 対象

対象は, A 大学の学生284名 (男子88名, 女子196名) で, 回答者の平均年齢は20.2歳 (SD = 1.8) であった。回答に不備のあった28名を除いた256名を分析対象とした。

#### 2. 方法

2008年10月に, 以下の質問紙の調査を実施した。

#### 3. 質問紙構成

##### (1) 孤独に対する捉え方尺度

予備調査によって作成された, 孤独に対する捉え方を測定する27項目の質問紙である。「全くそう思わない」から「非常にそう思う」までの7件法で回答を求めた。

##### (2) 改訂版 UCLA 孤独感尺度日本語版

(The revised UCLA Loneliness Scale)

諸井 (1991 b) による改訂版 UCLA 孤独感尺度日本語版を用いた。この尺度は, Russel, Peplau & Ferguson (1978) により標準化された The UCLA Loneliness Scale を Russel, Peplau & Cutrona (1980) が再検討し開発した, The revised UCLA Loneliness Scale の邦訳版である。孤独感の高さを測定する20項目の質問紙である。「けっして感じない」から「たびたび感じる」までの4件法で回答を求めた。

##### (3) 孤独感類型判別尺度

(Loneliness Scale by Ochiai)

落合 (1983) により作成された。人間同士理解・共感できると感じているか否か (LSO\_U), 人間の個性に気づいているか否か (LSO\_E) の2因子から構成される, 16項目の質問紙である。「いいえ」から「はい」までの5件法で回答を求めた。

#### (4) 自尊感情尺度

山本・松井・山成 (1982) により, Rosenberg の self - esteem 尺度を翻訳し作成された, 自尊感情の程度を測定する10項目の質問紙である。Rosenberg は自尊感情について, 自分を「非常によい (very good)」と捉える場合と, 「これでよい (good enough)」と捉える場合の二つの異なる意味を指摘し, 後者の立場に立ち尺度を作成している。「あてはまらない」から「あてはまる」までの5件法で回答を求めた。

#### (5) CES-D 日本語版

(The Center for Epidemiologic Studies Depression Scale, 以下 CES-D)

Radloff (1977) による Center for Epidemiologic Studies Depression Scale (CES-D) を島・鹿野・北村・浅井 (1985) が邦訳したものを用いた。一般母集団におけるうつ症状を疫学的に研究するために開発された, 20項目の尺度である。「まれにあるいはなかった」から「ほとんどあるいは全ての時間」までの4件法で回答を求めた。

#### (6) 多次元自我同一性尺度

(Multidimensional Ego Identity Scale, 以下 MEIS)

谷 (2001) により作成された。自己斉一性・連続性, 対自的同一性, 対他的同一性, 心理社会的同一性の4因子から構成される, 自我同一性の達成度を測定する20項目の質問紙である。「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」までの7件法で回答を求めた。

### 結果

#### 1. 孤独に対する捉え方と, UCLA, LSO, 自尊感情尺度, CES-D, MEIS の相関

孤独に対する捉え方尺度の下位因子と, UCLA, LSO, 自尊感情尺度, CES-D, MEIS との相関結果を Table 2 に示す。

Table 2 孤独に対する捉え方尺度各下位因子と各尺度間の相関

| 尺度        | 孤独に対する捉え方尺度 |          |        |
|-----------|-------------|----------|--------|
|           | 否定的評価       | 自己成長機能   | 肯定的評価  |
| UCLA      | 0.01        | -0.12 *  | 0.15 * |
| LSO       |             |          |        |
| LSO_U     | 0.01        | -0.21 ** | 0.07   |
| LSO_E     | -0.03       | -0.12 *  | -0.06  |
| 自尊感情      | -0.21 **    | 0.14 *   | 0.06   |
| CES-D     | 0.22 **     | -0.17 ** | -0.05  |
| MEIS      |             |          |        |
| 自己斉一性・連続性 | -0.24 **    | 0.05     | -0.01  |
| 対自的同一性    | -0.20 **    | 0.11     | 0.06   |
| 対他的同一性    | -0.16 **    | -0.01    | -0.11  |
| 心理社会的同一性  | -0.24 **    | 0.13 *   | 0.08   |

\*\*p<.01 \*p<.05



## 2. 孤独に対する捉え方の特徴

### 2-1. 孤独に対する捉え方の分類

調査対象を孤独に対する捉え方の特徴によって分類するために、孤独に対する捉え方尺度の「否定的評価」、「自己成長機能」、「肯定的評価」の合成得点を変量とした最近隣法によるクラスタ分析を行ったところ、3つのクラスタを得た。第1クラスタには104名、第2クラスタには115名、第3クラスタには37名の調査対象が含まれた。

次に各クラスタの特徴を明らかにするために、得られた3つのクラスタにおいて、「否定的評価」、「自己成長機能」、「肯定的評価」、各因子得点の一要因分散分析を行った。その結果、全てにおいて1%水準の有意な群間差がみられた ( $F(2,253) = 429.1$ ;  $F(2,253) = 13.8$ ;  $F(2,253) = 65.3$ )。TukeyのHSD法(5%水準)による多重比較を行ったところ、「否定的評価」については、第2クラスタは他の2つのクラスタよりも有意に高く、「自己成長機能」については、第1クラスタは他の2つのクラスタよりも有意に高く、「肯定的評価」については、第3クラスタは他の2つのクラスタよりも有意に高かった。各クラスタにおける各尺度得点についての平均値と標準偏差、分散分析および多重比較の結果をTable 3に示す。

### 2-2. 孤独に対する捉え方の各クラスタにおける UCLA, LSO, 自尊感情尺度, CES-D, MEIS の基礎統計量

孤独に対する捉え方の各クラスタにおける, UCLA, LSO, 自尊感情尺度, CES-D, MEIS の平均値およ

び標準偏差を Table 4 に示す。

### 2-3. 孤独に対する捉え方のクラスタ間における UCLA, LSO, 自尊感情尺度, CES-D, MEIS の差異

孤独に対する捉え方の3つのクラスタ間における UCLA, LSO, 自尊感情尺度, CES-D, MEIS の得点の差異を検討するために、孤独に対する捉え方の3つのクラスタにおいて、各尺度の因子得点の一要因分散分析を行った。

3つのクラスタ間において「UCLA」、「LSO\_U」では、有意な群間差はみられなかった ( $F(2,253) = 1.42$ , n.s.;  $F(2,253) = 1.31$ , n.s.) が、「LSO\_E」では、有意な群間差がみられた ( $F(2,253) = 4.70$ ,  $p < .01$ )。TukeyのHSD法(5%水準)を用いた多重比較を行ったところ、「LSO\_E」は、「第1クラスタ」が「第2クラスタ」よりも有意に高かった。「自尊感情」では、3つのクラスタ間に有意な群間差がみられた ( $F(2,253) = 5.31$ ,  $p < .01$ )。TukeyのHSD法(5%水準)を用いた多重比較を行ったところ、「自尊感情」は、「第3クラスタ」が他の2つのクラスタよりも有意に高かった。「CES-D」では、3つのクラスタ間に有意な群間差がみられた ( $F(2,253) = 4.99$ ,  $p < .01$ )。TukeyのHSD法(5%水準)を用いた多重比較を行ったところ、「CES-D」は、「第3クラスタ」が他の2つのクラスタよりも有意に低かった。MEISの下位因子である、「自己斉一性・連続性」、「対自的同一性」、「対他的同一性」、「心理社会的同一性」では、3つのクラスタ間に有意な群間差がみられた ( $F(2,253) = 7.88$ ,  $p < .01$ ;  $F(2,253) = 6.95$ ,  $p < .01$ ;  $F(2,253) =$

Table 3 3つのクラスタにおける孤独に対する捉え方尺度の尺度得点平均値、標準偏差と分散分析結果

|        | 第1クラスタ     | 第2クラスタ     | 第3クラスタ     | F値        | 多重比較              |
|--------|------------|------------|------------|-----------|-------------------|
| N      | 104        | 115        | 37         |           |                   |
| 否定的評価  | 56.9(6.27) | 72.8(7.97) | 33.8(7.43) | 429.1 *** | クラスタ3<クラスタ1<クラスタ2 |
| 自己成長機能 | 52.1(5.69) | 47.7(6.06) | 50.9(8.75) | 13.8 ***  | クラスタ2<クラスタ3<クラスタ1 |
| 肯定的評価  | 21.7(5.2)  | 15.2(5.03) | 24.4(5.59) | 65.3 ***  | クラスタ2<クラスタ1<クラスタ3 |

( )内は標準偏差 \*\*\* $p < .001$

Table 4 孤独に対する捉え方のクラスタ別各尺度の平均値および標準偏差

| 尺度        | 第1クラスタ     | 第2クラスタ     | 第3クラスタ     |
|-----------|------------|------------|------------|
| UCLA      | 38.6(10.1) | 36.8(9.35) | 36.1(8.09) |
| LSO       |            |            |            |
| LSO_U     | 8.56(6.03) | 9.79(6.10) | 9.84(5.89) |
| LSO_E     | 3.27(4.55) | 1.34(4.29) | 1.76(6.36) |
| 自尊感情      | 30.1(8.01) | 29.3(7.90) | 34.1(7.79) |
| CES-D     | 20.8(10.6) | 21.1(11.7) | 14.9(8.88) |
| MEIS      |            |            |            |
| 自己斉一性・連続性 | 21.0(7.57) | 21.8(7.04) | 26.4(6.66) |
| 対自的同一性    | 19.2(6.97) | 18.9(6.37) | 23.4(5.98) |
| 対他的同一性    | 19.1(5.54) | 19.1(6.21) | 21.9(6.06) |
| 心理社会的同一性  | 20.7(3.63) | 20.2(4.08) | 22.9(3.75) |

Table 5 孤独に対する捉え方のクラスタ間の各尺度因子得点の比較

| 尺度        | F値        | 多重比較                 |
|-----------|-----------|----------------------|
| UCLA      | 1.42 n.s. |                      |
| LSO       |           |                      |
| LSO_U     | 1.31 n.s. |                      |
| LSO_E     | 4.70 **   | 第1クラスタ>第2クラスタ        |
| 自尊感情      | 5.31 **   | 第1クラスタ=第2クラスタ<第3クラスタ |
| CES-D     | 4.99 **   | 第1クラスタ=第2クラスタ>第3クラスタ |
| MEIS      |           |                      |
| 自己斉一性・連続性 | 7.88 **   | 第1クラスタ=第2クラスタ<第3クラスタ |
| 対自的同一性    | 6.95 **   | 第1クラスタ=第2クラスタ<第3クラスタ |
| 対他的同一性    | 3.62 *    | 第1クラスタ=第2クラスタ<第3クラスタ |
| 心理社会的同一性  | 7.15 **   | 第1クラスタ=第2クラスタ<第3クラスタ |

\*\*p<.01 \*p<.05

3.62,  $p < .05$ ;  $F(2, 253) = 7.15$ ,  $p < .01$ )。そして、Tukey の HSD 法 (5 %水準) を用いた多重比較を行ったところ、全ての下位因子において、「第3クラスタ」が他の2つのクラスタよりも有意に高かった。以上の結果を、Table 5 に示す。

## 考 察

### 1. 孤独に対する捉え方尺度について

本研究の第一の目的は、青年の孤独に対する捉え方を明らかにすることであった。孤独に対する捉え方についての自由記述を分析した結果、それには、「否定的評価」、「自己成長機能」、「肯定的評価」の3つの側面があることが明らかになった。

「否定的評価」とは、孤独に対する否定的な情緒的イメージや捉え方である。この孤独への否定的評価が、孤独に対する捉え方の一部を成しているという本結果は、Peplau & Perlman (1979) による、孤独感是不快であり苦痛を伴うものという定義が孤独感研究の大半において援用されていることを踏まえると、共通する否定的側面であると考ええる。「自己成長機能」とは、孤独がもつ自己成長促進の機能に関する捉え方である。このような、孤独は自分を成長させる機能があるという側面は、従来から言及はされていたが (Moustakas, 1961; 小此木, 1979; 諸富, 2001)、本研究において初めて実証された知見といえる。「肯定的評価」とは、孤独を肯定的に評価する捉え方である。これまでの孤独感研究では、孤独とは、否定的感情を引き起こし個人にマイナスの影響を与えるものだという知見が大半を占めていることに對し、本結果から青年は孤独の一面を、好ましいもの、心地よいものと肯定的に捉えるという新たな知見が示されたといえる。

### 2. 孤独に対する捉え方と関連する要因について

本研究の第二の目的は、孤独に対する捉え方と関連する要因について検討することであった。その際、孤独に対する捉え方は前述した3因子からなることが明らかになったため、それを受けて、現代青年の孤独に対する捉え方の違いによって、孤独感、自尊感情、抑うつ、自我同一性達成度がどのように異なるか検討した。

#### 2-1. 青年の孤独に対する捉え方の特徴

本研究において、青年の孤独に対する捉え方は、質的に異なる「否定的評価」「自己成長機能」「肯定的評価」という捉え方の量的な差異によって、「第1クラスタ」「第2クラスタ」「第3クラスタ」の3つのタイプに分類された。

「第1クラスタ」の捉え方は、孤独に対する否定的評価、肯定的評価は平均的であり、自己成長機能の捉え方が最も高いことが特徴であった。つまり、孤独に対する捉え方として、孤独という事象を多面的に捉えるが、特に孤独の自己成長機能を重視する群があることが明らかになった。「第2クラスタ」は、孤独の自己成長機能に対する捉え方、肯定的捉え方が最も低く、否定的評価が最も高いことが特徴であった。つまり、孤独に対する捉え方が否定的である群があることが明らかになった。「第3クラスタ」は、自己成長機能に対する捉え方は平均的で、否定的評価が最も低く、肯定的な捉え方が最も高い群である。つまり、孤独に対して否定的な評価をせず、肯定的に捉える群があることが明らかになった。

#### 2-2. 孤独に対する捉え方と孤独感との関連

孤独に対する捉え方の3つのクラスタ間における UCLA や LSO にみられる孤独感の差異は、LSO\_E において認められた。すなわち、孤独に対する捉え方の違いによって、孤独感における個別性の自覚の程度

が異なることが示された。

孤独という事象を多面的に捉えるが、特に孤独の自己成長機能を重視するという特徴をもつ第1クラスタは、孤独に対して否定的である第2クラスタや、孤独に対して否定的な評価をせず、肯定的に捉える第3クラスタより、自分は他者とは異なる存在であるという自覚が高いことが明らかとなった。孤独に対する否定的な捉え方と、肯定的な捉え方の両方を有する場合、孤独を体験したときにその両方の捉え方の間で葛藤が生じる可能性がある。しかし、孤独は自己を成長させるものであるという認識が、孤独である自分と向き合わせる時間をうみ、自己の個性性を浮き彫りにさせるのではないだろうか。第2クラスタは、孤独体験をしたときにそのような葛藤が生じず、拒否的反応のみが生じやすいと考えられ、そのような機会が少ないと考えられる。また、LSO\_Eの、「結局、自分はひとりではないと思う」、「人間は、本来、ひとりぼっちなのだと思う」、「どんなに親しい人も、結局、自分とは別個の人間であると思う」などの項目には、自己の存在の個性性に対する肯定的な感じ方というより、「結局」、「ひとりぼっち」のように諦めや寂しさのニュアンスが含まれると思われる。このことを考慮すると、第3クラスタは、孤独を好ましく肯定的に捉えており、LSO\_Eで測られるような否定的感情を伴った孤独感とは低いと考えられる。

### 2-3. 孤独に対する捉え方と自尊感情との関連

孤独に対する捉え方の3つのクラスタ間で、第3クラスタが、第1クラスタ、第2クラスタよりも自尊感情得点が有意に高かった。第3クラスタは、孤独に対して否定的な評価をせず、肯定的に捉えている群であるため、孤独に出会ったとき、孤独に向き合うことを回避せず個別的な自己の存在に対して能動的に向き合い、その結果自身の個別的価値を認める機会が多いクラスタであると考えられる。孤独への肯定的な捉え方が最も高く否定的な評価が最も低いことから、孤独のもつ自己成長の機能が葛藤なくその個人に作用し、自尊感情が高まる可能性が考えられる。孤独感と自己意識の関連に関する先行研究から、孤独感と自尊感情の間には負の関連があることが示されている (Peplau & Perlman, 1979; Russel et al, 1980; Goswick & Jones, 1981; Hojat, 1982; 工藤・西川, 1983; Bell & Daly, 1985; Jones et al, 1985; 諸井, 1985, 1987, 1989, 1990; 宮下・細川, 1991) が、一方で本研究の結果から、孤独に対して否定的な評価をせず、肯定的に捉える者は、孤独を恐れず、その結果、自分

はこのままでよいのだという自尊感情が高まる可能性が示唆されたといえよう。以上の結果から、孤独に対する捉え方の在り方は、より対自的な側面である自己意識と関連していることが示唆されたといえる。

### 2-4. 孤独に対する捉え方と抑うつとの関連

孤独に対する捉え方の3つのクラスタ間で、第3クラスタが、第1クラスタ、第2クラスタよりも有意にCES-D得点が低かった。他の2つのクラスタの特徴と比較すると、第3クラスタが最も孤独に対して能動的に関わろうとする可能性があり、孤独を回避せず肯定的な意味を見出そうとすると考えられるため、孤独に出会ったとき抑うつのようなネガティブな反応は生じにくい可能性があると考えられる。Rehm (1977, 1981) は、自己コントロールについて、自己モニタリング、自己評価、自己強化の3段階の枠組みを唱え、抑うつ的な人は、自己モニタリングにおいて、自分の行動のポジティブなことに注意を向けずネガティブなことに注意を向けると述べている。この知見を踏まえると、抑うつ的な人は孤独の否定的な側面に意識が向く傾向があり、逆に、抑うつ傾向の低い人は、孤独の肯定的側面に意識が向く可能性があると考えられる。孤独感と精神的健康の関連に関する先行研究から、孤独感と抑うつとの間に正の関連があることが示されている (Russel et al, 1980; Diamant & Windholz, 1981; Hojat, 1982; 宮下・細川, 1991) が、本研究の結果から、孤独体験から有意な意味を得ることのできるような青年は、抑うつのようなネガティブな精神的健康の状態は生じにくい可能性があることが示唆されたといえよう。以上の結果から、孤独に対する捉え方の在り方は、精神的健康と関連していることが示唆されたといえる。

### 2-5. 孤独に対する捉え方と自我同一性達成度との関連

孤独に対する捉え方の3つのクラスタ間で、第3クラスタが、第1クラスタ、第2クラスタよりもMEISの自己同一性・連続性、対自的同一性、対他的同一性、心理社会的同一性の得点が有意に高かった。第3クラスタの青年は、自分が孤独な存在であるという自身の個性性に対しても回避せずその個性性に意義を見出すと考えられる。自分が「ひとり」の存在であることを肯定的に捉えている青年とは、ひとりの存在意義も理解していると推測される。そのような青年は、どのような場面や時間軸上においても自分はこの世にたった一人しかいない自分として存在し、自分が何をすべきかがわかっているという感覚をもつという可能性が示唆されたといえよう。以上の結果を踏まえると、青年



期における孤独感を捉えようとするとき, 青年期という発達の段階の特徴を踏まえることが重要であると同様に, 孤独に対する捉え方においても, 発達という軸が関連している可能性が示唆されたといえる。

### 総 合 考 察

青年期における孤独に対する捉え方として, 「否定的評価」, 「自己成長機能」, 「肯定的評価」の3つの要因が見出された。従来の孤独感研究において, 孤独感の体験はネガティブな主観的体験であり (Peplau & Perlman, 1979), 個人の精神的健康などの側面にマイナスの影響を及ぼすものであるという知見がほとんどであったが, 青年の抱く「孤独」という事象に対する捉え方は, 否定的な捉え方や肯定的な捉え方, 自己成長機能に対する捉え方という複数の要因から成り立つことが明らかとなった。

本研究において, 孤独に対する捉え方は孤独感と関連することが明らかにされたため, 今後の孤独感研究において, 孤独に対する捉え方という視点を導入することでより孤独感理解は深まっていくと考えられる。さらに, 孤独に対する捉え方は自尊感情などの自己意識, 抑うつなどの精神的健康と関連があることも明らかになった。そのため, 孤独感の程度や在り方がそのまま自己意識や精神的健康に影響を与えるのではなく, その前の段階として個人の持つ孤独に対する捉え方がどのような特徴をもっているかをみることで, 孤独感形成・影響のモデルをより細やかに検討していくことが可能であると考えられる。

本研究の問題点と課題としては, まず, 孤独に対する捉え方尺度における信頼性と妥当性の検討が不十分であることがあげられる。今後, 本尺度を用いて再検査信頼性, 基準関連妥当性などの検討を行う必要があるといえる。次に, 本研究においては青年を対象に調査を行っているが, 落合のLSOを用いた孤独感研究からは, 孤独感には発達差があることが明らかにされている。このことを考慮すると, 孤独に対する捉え方においても, 発達差の検討をより広い発達段階において調査し検討する必要があると考えられる。諸富(2001)は, 「孤独は決して避けるべき否定的なものではなく, 現代をタフに, しなやかに, かつクリエイティブに生きていくために不可欠の積極的な能力である」と述べている。本研究において得られた知見は, このような, 孤独が人間にとって必要で積極的な能力の一つであるという考えの一つの裏付けであるともいえる。

### 引 用 文 献

- Bell, R.A., & Daly, J.A. 1985 Some communication correlates of loneliness. *The southern Speech Communication Journal*, 50 : 121-142.
- Diamant, L., & Windholz, G. 1981 Loneliness in college students: Some Theoretical, empirical, and therapeutic considerations. *Journal of College Student Personnel*, 22 : 515-522.
- Erikson, E.H. 小此木啓吾 (訳編) 1973 自我同一性 誠信書房 (Erikson, E.H. 1959 Identity and the life cycle. New York: W.W. Norton & Company).
- Goswick, R.A., & Jones, W.H. 1981 Loneliness and expressive communication. *Journal of Abnormal Psychology*, 107 : 237-240.
- 原田 (慶澤) 華 1999 青年期の孤独感 質問紙とTAT 物語から見た内的世界の様相 京都大学大学院教育学部紀要, 45 : 393-405.
- 広沢俊宗 1985 孤独の原因, 感情反応, および対処行動に関する研究 ( ) 関西学院大学社会学部紀要, 51 : 157-168.
- 広沢俊宗 1986 孤独の原因, 感情反応, および対処行動に関する研究 ( ) 関西学院大学社会学部紀要, 53 : 127-136.
- 広沢俊宗 2001 孤独の原因, 感情反応, および対処行動に関する研究 ( ) 関西国際大学研究紀要, 2 : 85-96.
- 広沢俊宗 2002 孤独の感情, 対処行動に及ぼす孤独感, および Aloneness への耐性の影響 関西国際大学研究紀要, 3 : 81-96.
- Hojat, M. 1982 Loneliness as a function of selected personality variables. *Journal of Clinical Psychology*, 38 : 137-141.
- 今林俊一 1992 青年期における孤独感と自己受容に関する研究 鹿児島大学教育学部紀要教育科学編, 44 : 257-272.
- Jones, W.H., Carpenter, B.N., & Quintana, D. 1985 Personality and interpersonal predictors of loneliness in two culture. *Journal of Personality and Social Psychology*, 48 : 1503-1511.
- 小林邦雄 2006 大学生における孤独感と同一性の混乱 ひとつのケーススタディー Memoirs of the School of Biology-Oriented Science and Technology of Kinki University, 17 : 63-78.

- 工藤 力・西川正之 1983 孤独感に関する研究 ( ) 孤独感尺度の信頼性・妥当性の検討 実験社会心理学研究, 22(2) : 99-108.
- 工藤 力・西川正之・熊取谷由季央 1985 孤独感に関する研究 ( ) 孤独感の因果帰属の検討 大阪教育大学紀要第 部門, 34(2) : 149-157.
- 工藤 力・熊取谷由季央・西川正之 1986 孤独感に関する研究 ( ) 孤独感に対する対処行動の解明 大阪教育大学教育研究所報, 21 : 65-72.
- 宮下一博・細川あゆみ 1991 孤独感と性格・適応及び対処法略との関係 千葉大学教育学部研究紀要, 41(1) : 33-38.
- 諸井克英 1984 孤独感とペットに対する態度 実験社会心理学研究, 24 : 93-103.
- 諸井克英 1985 高校生における孤独感と自己意識 心理学研究, 56 : 237-240.
- 諸井克英 1986 大学新入生の生活事態変化に伴う孤独感 実験社会心理学研究, 25 : 115-125.
- 諸井克英 1987 大学生における孤独感と自己意識 実験社会心理学研究, 26 : 151-161.
- 諸井克英 1989 大学生における孤独感と対処法略 実験社会心理学研究, 30 : 141-151.
- 諸井克英 1990 大学生における孤独感と原因帰属 実験社会心理学研究, 30 : 41-52.
- 諸井克英 1991a 生活事態変化に伴う孤独感 人文論文集 (静岡大学人文学部社会学科・人文学科研究報告), 41 : 29-63.
- 諸井克英 1991b 改訂 UCLA 孤独感尺度の次元性の検討 静岡大学文学部 人文論集, 42 : 23-51.
- 諸富祥彦 2001 孤独であるためのレッスン NHK ブックス.
- Moustakas, C 1961 Loneliness Englewood Cliffs, N.J.: Prentice Hall 吉永和子 (訳) 1972 孤独 岩崎学術出版.
- 中村 薫 1986 孤独感の原因帰属に関する研究 自己の場合と他者の場合 心理学研究, 57 : 141-148.
- 中野綾子・永江誠司 1996 青年期における孤独感及び孤独感の受容と精神的健康 福岡教育大学紀要, 45(4) : 309-321.
- 野上康子・天谷裕子・太田伸幸・栗田統史・布施光代・西村萌子・長谷川美佐子・胡琴菊 青年期の“孤独観”を測定する尺度の作成 2000 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要心理発達科学, 47 : 247-268.
- 落合良行 1974 現代青年における孤独感の構造 ( ) 教育心理学研究, 22 : 162-170.
- 落合良行 1976 SCT における青年の孤独感の分析 東京教育大学教育学部紀要, 22 : 81-91.
- 落合良行 1982 孤独感の内包的構造に関する仮説 教育心理学研究, 30(3) : 69-74.
- 落合良行 1983 孤独感の類型判別尺度 (LSO) の作成 教育心理学研究, 31(4) : 332-336.
- 落合良行 1985a 生活感情の関連構造からみた青年期の孤独感に関する特徴 児童期・成人期・老年期との比較 静岡大学教育学部研究報告 (人文・社会科学篇), 35 : 157-164.
- 落合良行 1985b 青年期における孤独感を中心とした生活感情の関連構造 教育心理学研究, 33 : 70-75.
- 落合良行 1993 大学生における生活感情の分析 筑波心理学研究, 15 : 177-183
- 落合良行・菅沼美保子 1984 青年期における人格形成上での孤独感の否定的役割 静岡大学教育学部研究報告 (人文・社会科学篇), 34 : 143-166.
- 小此木啓吾 1979 青年期の孤独 青年心理, 12 : 16-28.
- Peplau, L.A. & Perlman, D. 1979 Blueprint for a social psychological theory of loneliness. In M. Cook & G. Wilson (Eds.) Love and attraction 101-110 Oxford: Pergamon Press.
- Radloff, L.S. 1977 The CES-D Scale: A self-report depression scale for research in the general population. Applied Psychological Measurement, 1 : 385-401.
- Rehm, L.P. 1977 A self-control model of depression. Behavior Therapy, 8 : 789-804.
- Rehm, L.P., Kornblith, S.J., O'hara, M.W., Lamparski, D.M., Romano, J.M., & Volkin, J. 1981 An evaluation of the majorsion. Behavior Modification, 5 : 459-490.
- Russel, D., Peplau, L.A., & Cutrona, C.E. 1980 The revised UCLA Loneliness Scale: Concurrent and Discriminant Validity evidence. Journal of Personality and Social Psychology, 39(3) : 472-480.
- Russel, D., Peplau, L.A., & Ferguson, M.L. 1978 Developing a measure of loneliness. Journal of Personality Assessment, 42 : 290-294.
- Spranger, E. 1953 Psychologie des Jugendalters.

- (土井竹治訳 青年の心理 1957 刀江書院 48). 68.  
杉山 成 2004 孤独感の類型とシャイネス 小樽商 吉山尚裕 1992 青年期の孤独感 孤独感と社会的傾  
科大学研究報告人文研究, 108 : 37-47. 性 大分県立芸術文化短期大学研究紀要, 30 :  
山本真理子・松井 豊・山成由紀子 1982 認知され 69-79.  
た自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30 : 64-

## How to grasp “the solitude” in adolescence in relation to the loneliness, self-consciousness, mental health, and ego identity

MIHOKO DAITO (*Graduate School of Psychology, Kurume University*)

SUMIKO IWAMOTO (*Department of Psychology, Faculty of Literature, Kurume University*)

### Abstract

The first purpose of this study was to clarify how the adolescence grasp the concept of “the solitude”. 85 university students answered the questionnaire which aimed to catch the factors affected their way of thinking toward the solitude. According to this result, we developed the instrument of how to grasp the solitude consisted of three factors: negative evaluation, self-growth function, and positive evaluation.

The second purpose was to investigate the qualitative difference in relation to the loneliness, self-respect, depression and the ego identity. 284 university students answered the 6 kinds of questionnaire: the instrument we developed of how to grasp the solitude, the revised UCLA Loneliness Scale, the Loneliness Scale by Ochiai, the self- respect scale, the Center for Epidemiologic Studies Depression Scale, and the Multidimensional Ego Identity Scale. In comparison with these results, the adolescents that the way of to grasp self-growth function is strong demonstrated the height of the consciousness of an individual self, while the adolescents that the way of to grasp positive evaluation is strong demonstrated high degree of the self- respect, low degree of depression, and the high level of the ego identity achievement.

**Key words:** how to grasp the solitude, loneliness, self-respect, depression, ego identity